8. 弟子であること Disciplehood

あなたの生のあらゆる状況があなたに教えてくれるのを許しましょう。

スーフィーの偉大な神秘家、ハサーンが死のうとしていたとき、ある人がたずねた。「ハサーン、あなたのマスターは誰だったのですか？」

彼は言った。「私には何千人ものマスターがいた。彼らの名前をあげるだけでも何か月、何年もかかるだろう。それに、そうするにはもう遅すぎる。だが三人のマスターについてははっきりと話しておこう。」

「ひとりは泥棒だった。あるとき私は砂漠で道に迷った。そしてある村に着いた頃には夜も非常に更けていた。すべてが閉ざされていた。だが最後になって、私は家の壁に穴を開けようとしているひとりの男を見つけた。私

「ところがその男は非常にすばらしかった――私は一か月も滞在した！ そして夜ごと彼は私に言ったものだ。『さて、私は仕事に行ってくる。君はゆっくり休んで、祈っていてくれたまえ』彼が帰ってくると、私はた

「何年も絶えることなく瞑想して、さらに瞑想しつづけていたにもかかわらず、なにも起こっていなかったとき、もう自分ではどうしようもなくて、絶望の淵にあり、このナンセンスすべてをやめにしようと思う瞬間が何回

「そして、私の二番目のマスターは犬だった。私は河へ行くところだった。喉が渇いていたのだ。すると犬がやってきた。彼も喉が渇いていた。彼は河のなかをのぞきこみ、そこにもう一匹の犬――自分自身の影――一
そこで私は、神から私にメッセージが来たのを知った――あらゆる恐れにもかかわらず人はジャンプしなければならない、と。」

「そして、三番目のマスターは幼い子どもだった。私がある町に入ってゆくと、子どもが火のついた蝋燭(ろうそく)を運んでいた。彼はモスクに蝋燭を置きにゆく途中だった。」
「ちょっとからかうつもりで私はその少年にたずねた。『自分でその蝋燭に火をつけたのかい？』彼は言った。『そうです、おじさん』。
そこで私はたずねた。『その蝋燭に火のついていない瞬間があって、その蝋燭に火のついている瞬間があった――その火がやってきた源を見せてくれないか？』
するその少年は笑って蝋燭を吹き消し、こう言った。『いま、火が消えるのを見たでしょう？ それはどこに行ったのでしょうか？ 言ってください！』」
「私のエゴはこなごなになった。私の全知識がこなごなになった。そしてその瞬間に私は自分の愚かさを感じた。それ以来私は自分の知りたがりをすべて落とした」

私にマスターがいなかったのは事実だ。それは私が弟子ではなかったという意味ではない――私は全存在を自分のマスターとして受け容れた。私の弟子としてのありようは、あなたのそれよりももっと大きなかかわりだ

道において、弟子であることは絶対に必要なことだ。弟子であるとはどういう意味だろう？ それは学ぶことができるということ、学ぶべくそこにいるということ、存在に対して感じやすいということだ。マスターとともに

マスターはスウィミング・プールだ。そこであなたはそこで泳ぎ方を学ぶことができる。一度学んだらすべての大洋があなたのものだ。
THE SECRET OF SECRETS, Vol.1, pp.184-188

Revision #4
Created 3 October 2024 06:57:58 by ゆう
Updated 23 October 2024 06:29:54 by ゆう